



Title	フィジーにおける先住民とインド系移民：ポストコロニアルは民族ナショナリズムを超えられるか？
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2008, 2007, p. 49-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フィジーにおける先住民とインド系移民

——ポストコロニアルは民族ナショナリズムを超えられるか？——

小 杉 世

1. はじめに

ここ数年、「オセアニア・南太平洋における先住民文化文学と移民文学の研究」という科研の課題で論文やエッセイを書いてきたが、その中でずっと触れずにいた国がフィジーである。南太平洋において、文学や政治について議論がかわされるとき、難しさを感じるのは、たとえばニュージーランドのマオリのようなオセアニアの先住民の中で確固としたステイタスをもつ先住民集団とニュージーランドに住む南太平洋諸島移民（マオリ以外のオセアニアの先住民）との関係、そして、フィジーにおけるインド系移民と先住民フィジー人との関係などである。ニュージーランドに在住していたサモア出身の作家は、ニュージーランドの先住民芸術を支援する組織 Toi Māori Aotearoa がマオリ以外のアーティストに補助金を出してくれないと愚痴る。また、トンガ出身のあるニュージーランド留学生は、ニュージーランドで南太平洋諸島出身の学生が奨学金を得るのは難しい、同じ成績ならキウイかマオリが通ると愚痴る。そして、フィジーでは、前の晩に仲良く一緒にお酒を飲んでいた先住民フィジー人作家とインド系フィジー人作家が、翌日の学会で、フィジー人作家のある戯曲のフィジー表象をめぐって、インド系フィジー人作家がそれを‘mis-representation’だと批判し、喧嘩をはじめた。かつての大英帝国の白人移住者植民地であり、もとイギリスの惑星的存在であったオーストラリアやニュージーランドと、さらにその衛星にあたる南太平洋諸島国家との関係、そしてグローバルなアメリカ経済文化の影響網と、さまざまな層の力関係がオセアニアには存在する。本稿は、フィジーにおける先住民フィジー人とインド系移民の確執の問題を、クーデターをめぐる言説や文学作品、エッセイをもとに考察し、民族ナショナリズムを超える可能性としてのポストコロニアル的視座を提唱するものである。

2. 年季契約労働者としてのインド系移民

フィジーは 1874 年にイギリスの植民地となった。1879 年に最初のインド人年季契約労働者 (indentured labourers) を乗せた船がフィジーに到着したから 1916 年にこの制度が廃止されるまで、6 万人以上のインド人がフィジーに輸送された (Gaunder 11, Lal 28, Satendra 2001:133)。彼らの末裔が、現在のインド系フィジー人である。彼らは英語とフィジー・ヒ

ンディー語（ヒンドゥスターニ語が現地語や英語の影響を受けてできた言語）を話し（フィジー語をある程度話せるインド系フィジー人もいる）、77.6% がヒンドゥー教徒、15.9% がイスラム教徒、6.2% がキリスト教徒である。一方、先住民フィジー人はフィジー語と英語を話し、99.3% がキリスト教徒である。¹ フィジーのほか、マレーシア、ガイアナ、ナタール、トリニダード（Naidu 7）などへ渡った「労働ディアスポラ」の一集団として、Robin Cohen（以下コーエン）は *Global Diasporas* (1997) で、フィジーにおけるインド人年季契約労働者について論じている。インド人ディアスポラの最近の超域研究の例としては、橋本和也の『ディアスポラと先住民』（2005）や Anand Singh の *Indian Diaspora—The 21st Century—Migration, Change and Adaption* (2007) など挙げられる。

インド系フィジー人の人口は、1936 年から 1946 年の 10 年の間に先住民フィジー人を上回った。² 在日韓国人の場合などと異なって、フィジーのインド系移民は全人口の半数近くを占め（現在は 38% に減っている）、イギリス政府によって過去に労働力として導入されたのであるからフィジー政府自体には責任がない。そのことが余計に問題を複雑にしている。イギリスから独立したのち、フィジーはいわばイギリスの植民地政策の置き土産として、大量のインド人を国土に残されることになった。インド系フィジー人は、植民地支配時代には労働力集団として位置づけられ、先住民フィジー人の首長制社会からは安全に隔てられていた。インド系フィジー人の特徴は、しばしば指摘されるように、カーストが存在しないこと、他の民族集団との婚姻が少なく、同化せずに独自の集団性を保っている点である。³ カーストを失った彼らは、インド社会に復帰することは困難である。フィジーの独立後、二つの民族集団の仲介＝垣根役であったイギリスが手を引き、文化、言語、宗教の異なるフィジー人とインド系フィジー人が、同じ国に共存していくことになったのだ。そして、今までイギリスがとってきた政治的リーダーシップをこの二つの民族集団のいずれかがとらなくてはならない状況になった。

3. 独立後のフィジーの政治状況

フィジーは 1970 年に独立以来、1987 年 5 月と 9 月、2000 年 5 月、2006 年 12 月の合計 4 回のクーデターを経験している。フィジーには、大統領と首相の両方がいて、大統領は先住民フィジー人の大首長会議（the Great Council of Chiefs）で指名されるので、常にフィジー人である。インド系フィジー人は、軍隊には入隊できず、公務員職や政府の要職につくことは難しかった。しかし、商業で成功してフィジーの経済を支えるインド系フィジー人が増えると、インド系フィジー人が政治の世界に足を踏み入れるようになる。フィジー人の支持する同盟党（the Alliance Party）のラトゥ・マラ首相は、有力なフィジー人首長の

¹ Fiji Islands Bureau of Statistics, “2007 Facts & Figures” (accessed 8 April, 2008)に掲載されている 1996 年の統計データによる。

² Fiji Islands Bureau of Statistics, “Census of Population 1881-1996” (accessed 8 April 2008).

³ 橋本 141, 156.

多い東部地域を優遇したため、その腐敗政治を批判する西部のフィジー人や、労働者対策を怠ってきた同盟党政府に不満をもつ都市のフィジー人労働者の票が、1987年4月の選挙では、労働党（FLP）に流れ、インド系住民の支持する国民連邦党（the National Federation Party）（以下 NFP）との連合政権が誕生、労働党の党首バヴァンドラが首相に就任した。⁴ 「人種や宗教による差別の廃止」⁵ を掲げる左派の労働党の初代党首バヴァンドラはフィジー人であるが、多くのインド系フィジー人の支持を得ていた。この1987年4月の選挙での労働党の勝利に危機を感じたフィジー人の陸軍中佐ランブカは、先住民フィジー人の権利を守るため、クーデターを計画し、5月14日、11名の武装部隊が国会議事堂を奇襲して首相と閣僚たちを拉致した。その後、ランブカは9月に再びクーデターを実行し、政権をにぎる。

2000年のクーデターは、労働党の党首であったマヘンドラ・チョードリーがフィジー初のインド人首相となった翌年に起きた。ジョージ・スペイトの率いる7名の武装集団が国会に乗り込み、首相と閣僚を人質にとった。チョードリーの行ったサトウキビ栽培の援助政策が先住民フィジー人の不評をかった。サトウキビ栽培には関わる農民の多数がインド人移民だからだ（本橋 184）。しかし、先住フィジー人の権利と生活を守ることを唱えてクーデターを起こしたスペイトは、ニュージーランドで教育を受けており、フィジー語は話せないという矛盾もあった。膠着状態が続いて苛立つ武装集団に銃をつきつけられ脅迫されても動じなかったといわれるチョードリーは、インド系フィジー人の英雄になった。インド系フィジー人の家には、ヒンズー教の神々の絵と並んでチョードリーの写真が飾られていることが多いという。⁶ 結局、このクーデターはバイニマラマ司令官の率いる軍隊がスペイトの武装集団をとりおさえ、失敗におわる。2002年、スペイトは反逆罪で死刑を宣告されるが、大統領の恩赦で終身刑になった。

1987年と2000年のクーデターは、インド系フィジー人に大きな幻滅感をもたらした。インド系農民のサトウキビ畑が焼かれ、都市部では、フィジー人による暴動や焼き討ち、略奪が起こった。首都スヴァの街の商店のショーウィンドーが割られて商品が盗まれた。初回のクーデターの前年1986年には、フィジー人の人口329,305（46.0%）に対してインド系フィジー人の人口は348,704（48.7%）⁷ であったが、1987年と2000年のクーデターの後、多くのインド系フィジー人が国を去り、オーストラリア、カナダ、アメリカ、イギリス、ニュージーランドなどへ移住した。2007年の統計では、人口比は、フィジー人57%、インド系フィジー人38%である。⁸

2006年12月のクーデターは、流血や暴動はなかった。1987年と2000年のクーデターは、先住民の利権を主張するフィジー人によるものであったのに対し、‘the clean-up coup’

⁴ Akram-Lodhi 6. 橋本 169-171 参照。

⁵ フィジー労働党ホームページ(<http://www.flp.org.fj/>)参照。

⁶ J. Prasad, “The role of Hindu and Muslim organizations during the 2006 election” in Fraenkel, 315.

⁷ Fiji Islands Bureau of Statistics, “Census of Population 1881-1996” (accessed 8 April 2008).

⁸ Fiji Islands Bureau of Statistics, “2007 Census of Population” (accessed 8 April 2008).

と呼ばれた 2006 年のクーデターは、2000 年のクーデター後に成立したガラセ内閣が抱えてきた政治腐敗を批判し、新しいマルチエスニックな政治の可能性を求めるものである点で、1987 年と 2000 年のクーデターの犠牲者であったインド系フィジー人たちから多数の支持を得ている。⁹ 2006 年のクーデターの首謀者であるフィジー人軍人バイニマラマは、2000 年のクーデターでスペイトの武装集団をとりおさえ、人質となっていたインド系フィジー人の首相チョードリーとその内閣メンバーを解放した人物である。1987 年のクーデター当時、厚生大臣であったインド系フィジー人作家 Satendra Nandan（以下ナンダン）は、同年の 2 回のクーデターの後、オーストラリアに移住して、キャンベラ大学で教鞭をとった。2005 年に再びフィジーに帰国し、現在フィジー大学で教鞭をとっている。ナンダンは、2006 年のクーデターを “the lesser of two evils” さらに “the best of four coups in Fiji’s history” と称し、バイニマラマ司令官を “one of the country’s most modern day leaders”¹⁰ と評価したことで、フィジー人から轟々たる非難をあびた。2007 年 1 月フィジー人の活動家たちはクーデターを批判するブログをつくった。¹¹ ブログによせられたナンダンへの匿名の抗議には、人権侵害にあたるようなひどいものもある。二つの民族間の紛争が決して終わらないことを思い知らされる。

フィジーではクーデターをめぐる世論に、宗教団体も大きく関わる。フィジー人の権利を守るという大義名分を掲げた 1987 年と 2000 年のクーデターは、メソディスト教会も支持していた。先住民フィジー人の権利を守ることは、異教徒（ヒンドゥー教徒やイスラム教徒であるインド系住民）からキリスト教徒を守ることであるからだ。一方、2006 年のクーデターには、ガラセ内閣を支持するフィジー人のキリスト教原理主義集団であるキリスト教連盟 ACCF (the Assembly of Christian Churches in Fiji) からの強い批判があった。¹²

4. フィジー訪問の記憶

私が以前フィジーに渡航したのは、2003 年の 8 月、クーデターの余波から回復したナンディの街は再び観光客でにぎわっていた。ここそこの商店からインド系音楽の流れる街を歩いていると本当にここは南太平洋なのだろうかと思ってしまう。ナンディはヴィチレヴ島の西部、国際空港の近くの街で、いわゆるフィジーの玄関口である。島の東にある首都スヴァ（南太平洋大学がある）へは車かバスで 4 時間ほど移動しなくてはならない。当時、筆者はこの国の政治状況にまだ詳しくなく、インド人の首相が率いる内閣がフィジー人のクーデターで覆されたということくらいしか知らなかった。クーデター関係者の裁判はまだ終わってなかったはずだが、そんなきなくさいニュースの影も日常の街にはあまりなかった。ナンディ滞在中にはインド系フィジー人の通う学校を訪ねた。インド系フィジー人は

⁹ Fraenkel 422-423.

¹⁰ Fiji TV, One National News, 21 March 2007.

¹¹ Xavier La Canna, “Fijian activists turn to blogs to protest coup,” *NZ Herald* (Mar 20, 2007).

¹² Barr 27.

フィジー人と共学の公立学校に通うこともできるが、多くはインド系フィジー人のための私立学校に通っている。フィジー人が通う学校とはかなり雰囲気が違う。フィジー人のインド系住民に対する不満のひとつは、移民である彼らの多くが先住民フィジー人よりも経済力をもつことであるが、ナンディの街でも大手の土産物店はインド系フィジー人の経営である。きれいな店構えで、クレジットカードが使える、フィジー人の店のように、店員が客にうるさくつきまとうことはなく、値段はちゃんと決まっているので安心して買い物ができる。(ただし、一銭たりとも負けてはくれない。)商品は社名とイラストの入った上等のプラスチックバッグにいらてくれる。日本人の観光ツアー客がやってくるので、日本語で対応できるインド系フィジー人の店員もいる。こういう店は、団体観光客がお土産を買っていくので、努力しなくても売り上げがあがる。一方、フィジー人の経営する小さな土産物店は、こうした大手の店に流れてしまう観光客を必死につかもうとする。客寄せにカヴァを無料でふるまう店もあり、私がカヴァを初めて飲んだのも、そんな店の一軒だった。主人によれば、この店の土産物はみんな村の親戚がつくったもので、店では「ヴィレッジ・ステイ」の仲介もしているという。カヴァのお礼に小さい買い物をしたが、値切った金額をそのままチップで渡せというのにだまされたような気がして腹を立てると、主人は「納得しないならいい、チップはいらない。」と急に引き下がる。結局、半額のチップを渡して店を出た。しかし、その後、インド系フィジー人の経営する大手の店で、さきほど買った以上の買い物をしている自分に気づき、同じお金をおとすならば、村に仕送りを待つ親戚が多くいる小さな商店の方がよかったかもしれないと、自分の行動に矛盾を感じたのを覚えている。

5. クーデターをめぐる

1980年代以降、現在まで、多くのインド系フィジー人作家、先住民フィジー人作家、ロトゥマ島出身のマイノリティー作家、そのほか、スリランカ出身やトンガなど南太平洋諸島国家出身の作家などによる多くの文学作品(小説、戯曲、詩)やアンソロジー、エッセイが出版されている。その中には、1987年と2000年のクーデターをめぐるものも多い。インド系フィジー人作家サテンドラ・ナンドンは、自伝小説 *The Wounded Sea* (1991)、彼の人生の拠点となる4つの都市(ナンディ、デリー、スヴァ、キャンベラ)での日々を描いた四都物語であるエッセイ *Requiem for a Rainbow: A Fijian Indian Story* (2001)などで、1987年のクーデターの体験と、フィジーを離れることになったいきさつを語っている。また、インド系フィジー人の著者たちによるエッセイ集 *Stolen Worlds: Fiji Indian Fragments* (2005)の巻頭のエッセイ“Ancestors: Distant Mirrors”において、ナンドンは、インド系フィジー人の先祖が年季契約労働者として自らの涙と汗を肥やしに耕してきたこの土地に対する思い入れの深さを次のように語る。

They were poor in material terms but the places in their hearts were suffused with a sense of the

spiritual: the ground on which they worked and worshipped was theirs—generations had trod upon it. It was the most hallowed piece of earth they had to grow up in like a mother's womb: whole and warm, beautiful and life-giving. . . . Many of us have grown up on the ocean of stories in the Ramayan and the Mahabharat. But to my mind the most wondrous epic is the odyssey of these simple men and women who came to the islands not as conquerors but workers—the true creators in any society. The soil they tilled became part of their soul. . . . It is an epic without wars and killings. (*Stolen Worlds*, 7-9)

アフリカからサトウキビ農園の労働力として連れてこられた黒人奴隷たちを先祖にもつセントルシアの村の漁師たちの日常を描いた *Omeros* (1990) の著者、カリブの詩人 Derek Walcott を思わせる言葉である。10,000 マイルの海を渡ってフィジーにやってきたインド人年季契約労働者たちが、新しい土地において、世代を重ね農業労働を通して形成したこの土地への帰属感を、1987年のクーデターは突然打ち砕き、インド系フィジー人3世、4世の彼らは、自分たちの生まれた土地、「故郷 (homeland)」(*SW*, 8) を再び失うことになった。先に触れたエッセイ集では、ナンダンと同様 1987 年にフィジーを去った Sulochana Chand も、両民族間に長年をかけて築かれた理解の橋はクーデターによってすべて焼き払われ (“all the bridges of understanding built over the years were suddenly burnt, dividing the country on racial lines” *SW*, 42)、世界の動きとは逆行してフィジーはアパルトヘイト状態に戻ってしまったと述べる。

垣根涼介の小説『真夏の島に咲く花は』(2006) は、2000 年のクーデターが起きた当時のナンディを舞台にしている。ナンディで日本料理店を営む日本人青年 (良昭) とその恋人であるインド系フィジー人女性 (サティー)、旅行代理店で働く日本人女性 (アコ) とガソリンスタンドで働く恋人のフィジー人青年 (チョネ) という 2 組の男女とそのとりまきを登場人物とするこのフィクションは、フィジー人とインド系フィジー人の関係だけでなく、中国人や日本人などのアジア系住民に対するフィジー人とインド系住民のまなざし、同じ街に住んで商売を営みながらも、画然とした経済的な格差がある 2 組の男女の恋愛関係を中心に、フィジーにおける先住民と移民の問題を描いている。クーデター当時大きな混乱の起きたスヴァに比べて、先住民フィジー人とインド系フィジー人との摩擦がより少なかった西部地域¹³ のナンディを舞台にすることで、日本人作家として部外者が政治的動乱の中核を直接描くことの困難さをうまく回避しながら、クーデター後もフィジーにとどまることを決意した日本人青年良昭の視点から、かつて恋人同士であったフィジー人チョネとインド系フィジー人サティーの実を結ばなかった関係を描いている。

フィジー人作家 Joseph Veramu の短編集 *Sunrise to the Coup* (2005) は、2000 年 5 月のクーデター当時に起こったスヴァの街でのフィジー人たちによる破壊・略奪行為、暴力をより

¹³ 春日 342 参照。

如実に描いている。ディストピア短編フィクション“The Road to Damascus”では、1987年のクーデター後の軍事政権下で、インド人を150の大きな保留地に収容し、「純粋なフィジー人 (pure Fijians)」を生産するための「生殖センター(procreation centres)」(46)の設立を推奨する Ratu Varani というフィジー人の大臣が、あるとき突然の宗教的啓示で自分の誤りに気づき改悛したところ、「頭がおかしくなった (mental case)」(48)と判断され免職になる。クーデター後の破壊・略奪行為の現場の騒動に乗じて盗んだロレックスの腕時計、ナイキのスニーカー、イタリア製の高級スーツといったブランド商品をちぐはぐに身につけたフィジー人患者たちであふれる病院の待合室で、耐え難い歯痛におそわれたフィジー人主人公が盗んだリーボックのジャンパーとプーマのカーゴパンツを脱ぎ捨てて、楽になる話 (“The Tooth Ache”) など、狂気じみた行動の後で覚醒する人間を描いている。また、2000年のクーデター後のスヴァで、フィジー人集団に袋叩きにされそうになったインド人男性の上にとっさに自らの身を投げ出してかばったフィジー人青年の奇跡的な瞬間が、暴動を報道するテレビカメラに偶然映り、その青年がかつての自分の教え子だと気づく教師の話 (“The Television Footage”) では、憎しみと暴力の支配する街に一瞬垣間見られる人の善意にわずかな希望を託している。一方、“We should retake the city.... It is our Canaan. Like Joshua, we are for God Jehovah. We cannot allow the evil of non-Christians to spread here.” (“The March” 9) と酒場で議論するフィジー人登場人物の発言は、先に述べたようなクーデターを支えるキリスト教原理主義の言説を端的に示すものである。このようなキリスト教原理主義の言説が、たとえば、アメリカの中東に対する政策にも関連することを思えば、植民地教育によって熱心なキリスト教になった先住民フィジー人たちは、いつのまにか、西欧の非西欧世界に対する支配正当化の理論に巻き込まれていることになる。

フィジーの北にあるロトゥマ島出身のマイノリティー作家 Vilsoni Hereniko の *The Monster (A Fantasy)* は、1987年のクーデター直後にスヴァの南太平洋大学で上演されたベケット的でアレゴリカルな短い戯曲である。銃声と叫び声、人々の逃げる足音の響く中、二人の人間 (Ta と Rua) がひとつのバスケットに入ったわずかばかりの食べ物を奪い合おうとしている。

Ta : Why don't you go back? . . . There's not enough food for two people.

Rua : There's nothing to go back to. Besides, I was born here.

Ta : Don't you have any relatives to look after you?

Rua : I did. But they're all killed, or moved away. (*The Monster, in Beyond Ceremony*, pp.94, 99)

Rua に食べ物を与えようとしない Ta、帰るところがなく身内はみんな殺されたという Rua、フィジー人とインド系フィジー人を思わせる二人は、舞台の上で取っ組み合ううちにふと巨大な醜い怪物 (“enormous, ugly, multi-coloured and horrible”) が自分たちの背後に忍び寄っていることに気づき、二人で共にその怪物と殺す。とたんに二人を憎しみで縛っていた

何かが解け、その変化に二人が気づくところで夜が明けるという結末である。この戯曲に“A Fantasy”と副題がついているのは、対立する二つの民族のこのシンプルな和解のヴィジョンが現実には実現しがたいものであることを示している。

フィジー人作家 Larry Thomas の戯曲 *To Let You Know* (1997 年初演) は、外国にいる息子と娘に向かってフィジーの近況（憲法改正と土地をめぐる両民族の確執など）を手紙で語るフィジー人とインド系フィジー人の父親のモノログ、フィジーを去るインド系移民とフィジー人の対話、そして、フィジー人でもインド系移民でもない（フィジー人、ヨーロッパ人、中国人、サモア人、インド人などの混血で、それゆえに“nobody”あるいは“nothing”とみなされる）マイノリティの人物たちのモノログからなるアレゴリカルな戯曲である。この戯曲にもまた、二つの民族のある和解のヴィジョンが描かれる。最初は別々のリズムに合わせて踊っていたフィジー人戦士とサリーをまとったインド人女性の踊りがいつの間にかひとつの調和した動きになる（“unison”）という視覚的、聴覚的表現で、そのヴィジョンを提示している。

インド系の作家がクーデターに対して大きな喪失感と幻滅感を表明するのに対して、フィジー人作家やマイノリティ作家は、このようにアレゴリカルな形で、二つの民族の融和の希望を描こうとする。しかし、インド系作家も絶望感のみを描くわけではない。インド系フィジー人作家のエッセイ集や小説には、フィジー人の政治家（元首相）ラトゥ・マラがしばしば登場する。散歩の途上で、手を振って挨拶をする友人として、また、庭で作業をしていたフィジー人労働者をベランダから追い払おうとしたイギリス人にくっつかかったエピソードなど、晩年批判された腐敗政治家としてだけではない、マラの人間側面が垣間見られる。フィジー人やインド系フィジー人、南太平洋諸国出身の作家や学者、学生たちが集うフィジーの南太平洋大学のようなコスモポリタンの空間は、民族を超えた寛容な視点に立ってこの国をみつめる文学作品を生み出す場として大きな可能性をもつ。

6. フィジーの教育制度

フィジー人とインド系移民、この二つの異なった民族の国家統合をめざして、独立後のフィジーでは、1970 年代から 1980 年代にかけて、多民族・多文化教育の可能性が検討されなかったわけではなかった。インド系フィジー人生徒の多い学校にフィジー人の教師を、フィジー人生徒の多い学校にインド系フィジー人の教師を配属する試みや、インド系フィジー人の学校でフィジー語を教える、あるいは、フィジーのすべての学校でフィジー語とヒンディー語を必須科目にするなどの“cross-cultural language learning” (Gauder 136, 159) の必要性の主張もあったが、その実現を待たずに 1987 年のクーデターが発生したこと、依然としてフィジーの学校制度がモノ・カルチュラルな性質を持ち続けていることを Padmini Gauder は *Education & Race Relations in Fiji 1835-1998* で論じている。

南太平洋大学で教鞭をとるインド系フィジー人文学者である Subramani（以下スブラマニ）は、*Altering Imagination* (1995) の中で、“cultural literacy” (249) を育てる教育の必要性

を論じている。両民族が互いに自分たちを被害者とみなし、「他者の苦境」(“the other’s predicament” 36)を想像しようとしなかったこのフィジーにおいて、「すべての市民がこの国をを故国(homeland)と呼べる政治的環境」(214)をつくりあげるには、「異なったものの見方」(“alternative viewpoints” 214)を理解するための「創造的想像力」(“creative imagination”)が必要であるという。文学的想像力はそのひとつである。

7. 民族ナショナリズムを超えて

橋本和也は『ディアスポラと先住民』(2005)において、土地に対する民主主義的な平等の権利を訴えるインド系フィジー人の主張の背後にグローバル資本主義の理論、すなわち、「移民による新たな植民地支配」(橋本 274)の論理をよみとる。しかし、筆者には、橋本の論は独立以降の資本主義的に経済力を伸ばしてきたインド系移民のごく最近の姿に焦点をあてすぎているように思われる。橋本自身も認めるように、すべてのインド人がフィジーで「金持ち」なわけではない。フィジーの国土の83%は、「譲渡不能な氏族共有地」(春日 342)としてフィジー人が所有する。インド系住民に国をのっとられるという危機感を先住民フィジー人たちがもつようになった1980年代後半には、インド系住民の中には土地の借用契約の更新を拒まれ、不法居住者となる者もいた。¹⁴ 先住民は従来の土地において白人入植者の支配を受け、土地を奪われ、苦難に耐えてきた。しかし、またインド系フィジー人の年季契約労働者たちの末裔も、先祖がこの地に到着してから139年間、耕してきた土地に強いつながりをもちながらもその所有は許されず、カーストのある故郷インドにも戻れないディアスポラとして、差別と苦難に耐えてきた。その歴史の過程をみれば、インド人が経済的に「のしあがって」きたのは、ほんの近年のことである。イギリス人の仲介業者に多くはだまされ(フィジーはカルカッタのすぐ近くで年に一度は帰れるし、貯金もできると言われた者、行方不明になった夫を探しにカルカッタへ行ってわけがわからないうちにフィジー行きの船に乗せられた女性など¹⁵)、フィジーに連れてこられたインド人は、フィジーの独立後、フィジー人エリートの握る政権下で差別に耐えてきた。橋本はインド系住民が先住民のフィジー人を「ジュンガリ(野蛮人)」と呼び、自分たちよりも劣った文化をもつ者として差別意識をもっていると述べるが(橋本 146, 270)、差別意識は決して一方的なものではない。インド人がフィジー人との婚姻を望まないことを批判し、「混血により、数世代後には、みな同じ血を分け持つ<フィジー人>となり、<土地>も<政治>もそのときには民族問題としてではなく、別のレヴェルの問題として語られることになるだろう。」(橋本 249)という橋本の見解には、一種の押し付けがましさを感じる。また橋本は、さきほどふれたインド系フィジー人文学者スブラマニの「プリュラリズム」を「前世紀的見解」(217)と批判し、「インド人は現状のまま変わる必要がなく、フィジー人を経済的に周辺化し続け、横柄で恩着せがましい態度でフィジー人を辱めるような関係を続け

¹⁴ Chaudhary 155-159.

¹⁵ Naidu 20-21.

るという表明」(221)であると解する。これは大きな誤解であることを述べておかななくてはならない。スブラマニは、“No culture is pure any more. . . . Most of us carry more than one culture in our heads” (197) と複数の文化が互いに関わりあい変容する可能性をポジティブに認めているのである。

宗教・文化・言語の異なる民族が、それぞれの文化や宗教・言語を保ちながら、また異なる集団の文化に対する理解や言語に対する知識をもちながら、同じ国土の中に共存することは不可能ではないはずだ。それは、多言語・多文化を包摂する言語文化教育によって達成される。それは決して、マルチカルチュラリズムの名のもとでの分離主義やネオ・アパルトヘイトなどではない。インド系住民に同化を求める橋本の論とは違う解決法があるはずだ。先住民もインド系移民も、イギリスの植民地政策のもたらしたひずみが原因で現在いろいろな問題を抱えている。これはポストコロニアルな状況において、先住民と移民が共に解決をはからなくてはならない問題であり、せまい排他的民族主義は不毛である。ニュージーランドやオーストラリアの先住民集団は、1987年と2000年のクーデターが起きたとき、先住民の権利を主張する側に立ち、フィジー人を擁護した。しかし、先住民の権利を守るという単純な理論だけでは、南太平洋の諸問題は解決しない。

3年前、オークランド大学で、マオリの作家 Witi Ihimaera にインタビューをしたとき、日本人執筆者数名の共著『ポストコロニアル文学の現在』をお土産に手渡した。日本語で書かれた本なので内容は読めないが、頁をばらばらめくり写真を見て、「友人たち（ほかのポストコロニアル作家たち）がいっぱい載っているね。」とほほえんで、「我々（ポストコロニアル作家たち）はみな手をとりあって行かなくてはならない。国は違っても抱える問題に共通点は多いのだから。」と言っていた言葉が思い出される。

インド系フィジー人の文学には、しばしば、シェイクスピアやディケンズ、ホメロスの『オデュッセイア』と並んで『ラーマーヤナ』が言及される。近年のフィジーにおいて経済的な力を伸ばすに従って先住民フィジー人からの反発を強く受けるようになったインド系フィジー人がユダヤ人高利貸のシャイロックの登場する『ヴェニスの商人』に何らかの共感を持つことは十分に理解できるし、故郷を離れて放浪するオデュッセイア、故郷を追われ、放浪の後に帰還するラーマの物語に、インド人ディアスポラが自己同化しようとすることも想像に難くない。¹⁶ 「ヒンドゥー教徒ディアスポラの構造的特徴」のひとつは「『ラーマーヤナ』を主要経典としていることである」とコーエンは述べる（コーエン 114）。インドとイギリスの文化遺産を受け継ぎ、フィジーに生きる現在のインド系フィジー人のたどった道は、それ自体がナンダンの述べるように壮大な叙事詩である。

英語やフィジー語起源の語彙を含むフィジー・ヒンディー語の特徴を指して、「対立にもかかわらず、共生の歴史はフィジー人とフィジー・インド人の言語文化にすでに刻印されているのだ」(242) という中村和恵の指摘は興味深い。異なる民族同士が同じ国で、同化

¹⁶ 中村も『ラーマーヤナ』とインド系フィジー人の歴史を重ねて論じている。pp.236-237.

でもなく支配でもなくお互いを尊重し共感しながら共存する道を模索していくとき、フィジーは西洋文化と先住民文化と移民文化との交渉の上に成り立つ‘multi-racial’で‘multi-lingual’な新しい文化の形成という課題において、言語文化変容論に大きな道標を示すことになるだろう。インドは近年の産業の発展にともない大きく変わりつつある。それに連動して、フィジーのインド系ディアスポラとインドとの関係も、フィジーの中における彼らの立場も変わってくるだろう。2003年にフィジーを訪れてからすでに5年が経とうとしている。2006年に4度目のクーデターを経たフィジー、また、この国がどのように変わりつつあるのか、この目で確かめる機会を得たいと思っている。

※ 本稿の作成にあたっては、文部科学省科学研究費助成金（若手研究B「オセアニア・南太平洋における先住民文学文化と移民文学の研究」H17-H19年度）を受けた。

引用・参考文献

- Ali, Ahmed, *Girmit: Indian Indenture Experience in Fiji*. Suva: Quality Print Ltd, 2004.
- Barr, Kevin J., *Thinking about Democracy Today*. Suva: Ecumenical Centre for Research Education and Advocacy, 2007.
- Chaudhary, Tulsi R., “The Squatters of Sigatoka Sandhills, Fiji” in *In Search of Home*. Institute of Pacific Studies of the University of the South Pacific, 1987. pp. 155-172.
- Fiji Islands Bureau of Statistics, “Census of Population 1881-1996” (accessed 8 April 2008).
http://www.spc.int/prism/country/fj/stats/cens&surveys/Popu_census.htm
- Fiji Islands Bureau of Statistics, “2007 Census of Population” (accessed 8 April 2008).
http://www.spc.int/prism/country/fj/stats/Census2007/census07_index.htm
- Fiji Islands Bureau of Statistics, “2007 Facts & Figures” (accessed 8 April 2008).
<http://www.spc.int/prism/country/fj/stats/Fiji%20Facts%20%20Figures%20As%20At%20Jul%202007.pdf>
- Fiji TV, One National News, 21 March 2007. <http://www.fjiv.com.fj/index.cfm?si=main.resources&cmd=forumview&uid=newsnational&cid=1184> (accessed 8 April, 2008).
- Fraenkel, Jon & Firth, Stewart, *From Election to Coup in Fiji: The 2006 Campaign and its Aftermath*. Canberra: Asia Pacific Press, 2007.
- Gaskell, Ian ed., *Beyond Ceremony: An Anthology of Drama from Fiji*. Suva: Institute of Pacific Studies and Pacific Writing Forum, University of South Pacific, 2001.
- Gauner, Padmini, *Education & Race Relations in Fiji: 1935-1998*. Lautoka: Universal Printing Press, 1999.
- Lal, Brij V, *Girmitiyas: The Origins of the Fiji Indians*. Lautoka: Fiji Institute of Applied Studies, 2004.

- Naidu, Vijay, *Violence of Indenture in Fiji*. Lautoka: Fiji Institute of Applied Studies, 2004.
- Nandan, Kavita, ed., *Stolen Worlds: Fijian Indian Fragments*. New Delhi, Canberra, Nadi, Auckland: Ivy Press International, 2005.
- Nandan, Satendra, *Requiem for a Rainbow: A Fijian Indian Story*. Pacific Indian Publications, 2001.
- , *The Wounded Sea*. East Roseville: Simon & Schuster, 1991.
- Prasad, Rajendra, *Tears in Paradise: A Personal and Historical Journey, 1879-2004*. Auckland: Glade Publishers, 2004.
- Singh, Anand, *Indian Diaspora—The 21st Century—Migration, Change and Adaption*. Delhi: Kamla-Raj Enterprises, 2007.
- Sotheeswaran, Sivamalar, *Stories from the South Pacific*. Kingston College International, 2007.
- Subramani, *Altering Imagination*. Suva: Fiji Writers' Association, 1995.
- Thomas, Larry, *To Let You Know & Other Plays*. Suva: Pacific Writing Forum, 2002.
- Veramu, Joseph, *Sunrise to the Coup and Other Stories*. Lautoka Campus: University of the South Pacific, 2005.
- Xavier La Canna, "Fijian activists turn to blogs to protest coup" in *New Zealand Herald*, 20 March, 2007. http://www.nzherald.co.nz/section/2/story.cfm?c_id=2&objectid=10429847 (accessed 8 April, 2008).
- 垣根涼介『真夏の島に咲く花は』講談社、2006年。
- 春日直樹『太平洋のラスプーチン：ヴィチ・カンバニ運動の歴史人類学』世界思想社、2001年。中村和恵「傷ついた海——苦悩するフィジーのインド系住民と新しい南太平洋の文学」『海のアジア①：海のパラダイム』岩波書店、2000年。pp.219-246。
- 橋本和也『ディアスポラと先住民：民主主義・多文化主義とナショナリズム』世界思想社、2005年。
- ロビン・コーエン『グローバル・ディアスポラ』明石書店、2001年。